

悪とつまずきの心理学

—— 河合隼雄の教育思想 ——

東 谷 孝 一*

はじめに

臨床心理学者として知られる河合隼雄氏は、一般に教育学の分野に含まれることがらにかんしても多くの著作を残している。本論文は、河合氏が教育の分野にかんして行なった思索のうち、とりわけ子どもと悪のかかわりや子どものつまずきといったテーマにかかわるものを取り上げ、それらに対して若干の考察を加えようとするものである。現代社会のなかで、私たちが子どもとともに生きていくうえで導きとなる河合氏の思考を可能な限り学び取ることができるよう試みたい。

日本人として初めてユング派分析家の資格を取得し、京都大学教育学部教授を務め、日本臨床心理士会を設立し、晩年は文化庁長官としても活躍した河合氏については多くの方が何らかの仕方でご存知のことであろう。氏の著書に親しんでおられる方も多くであろうし、また講演を聴講された方も多くおられることであろう。しかし、京都大学の理学部数学科を卒業している河合氏がどのような経緯によって臨床心理学の研究者となるにいたったのかについては、一般には必ずしもよく知られていないかもしれない。そこで、私たちはまず、河合氏がどのようにして臨床心理学研究の道に進むことになったのか、その経緯

* 福岡大学人文学部非常勤講師

をたずねることから考察を始めることにしたい。この経緯について、たとえば大きく大略的な仕方においてであれ目を向けるとき、私たちは子どもに対する河合氏のかかわり方のいわば底流をなすものに出会うことができるように思われるのである。

1 京都大学数学科時代

神戸高専時代に「ともかく大学、それも京大に行きたいと思って」いた河合氏は、「数学ができるから、数学科を受けることになった」が、「学科はどこでもいい」と思っていたという。¹1948年に京都大学の数学科に入学した河合氏は懸命に数学の勉強に取り組むが、「自分は研究者になれない」と思っていたという。²数学科に所属する他の学生はその多くが三高から京大へという、いわゆるエリートコースを経て進学していたのに対し、自分が高専から来ていることに「すごい劣等感」があったうえに、「おまけに数学というのがまたぜんぜんわからない」という体験を河合氏はしている。³「そんなに数学がわからない」のならば、もう一度勉強をしろと河合氏は数学の歴史を学んでみることにしたが、しかしそこに登場してくる人物はみな天才ばかりで「よけいげっそり」したという。⁴数学はときに学問の女王という言い方がされることがある。しかし、河合氏は「女王さんをチラッと見たけど、女王は結婚の相手にならない。でも、路地のほうへ行って糟糠の妻＝臨床心理学と知り合った」と自分はよく冗談で言っていたと語っている。⁵

いろいろ考えたが進むべき方向性が定まらず、「何をしたいかわからないから、ともかく一年間休もう」と大学2年の終わりに考えるようになったと河合氏は語る。⁶しかし、人はかりに自らの思いがいちおう定まったとしても、そのことのみによっては自分の身の振り方を決めることができない場合がある。周囲の人たちの同意を得なければならないことがあるからである。「ぼくはあのころ結核やったらどんなにええやろと思ったですね」と氏はそのときの自ら

の心境を振り返っている。⁷ 当時は「なんでもないのに」大学を1年休学するのは難しい時代であった。⁸

氏の考えに対して、すぐ上の雅雄兄は1年休学してゆっくり進路を考えるようにアドバイスをくれ、母親もまた氏の話にすぐに理解を示してくれた。しかし、河合氏にとっての難関はむしろそれからだったようである。氏は次のように言っている。

「うちの親父は前から話をしているように、自分の本文を尽くしてがんばっているでしょう。学生は勉強するのが本文なのに、一年間休んで家でブラブラするなんていうことを親父にどう説得するか悩みました。結局、母親と雅雄の二人が「ぼくらが助けてやるから言え」ということになって親父に言ったのです。そうしたら親父は「ああ、休んだらええ」と言う。それも理由がないんですよ。」⁹

こうして、河合氏は一年間家で過ごし、その間もう一度数学を必死で勉強したりした末、「本当に意味のあることをしようと思ったら何になればよいか考えて」高校の教師の道を選ぶことになったという。¹⁰ 河合氏は自分がもともと「教えるのがものすごく好き」であったし、「教育が好き」であったと語っている。¹¹ そこで高校の教師として超一流になることを決意した河合氏は、教師として進歩し続けるために子どもの心理の研究が必要だと考えて、心理学研究に向かうことになった。

2 混迷と共感

この一連の経験は河合氏の後の歩みにとって大きな意味を持っているように私には思われる。確かに、数学研究からの方向転換という経緯なくしては、河合氏が臨床心理学を研究することはなかったかもしれない。その意味でこの経緯は決定的な重要性をもっている。しかし、以上の点に劣らないくらい私にとって印象深いことは次のことである。すなわち、教育における河合氏の子どもに

対するかかわり方にはそれを形成している根本的な姿勢とでも呼びうるものが見られるのであるが、その根本的な姿勢とでも呼びうるものに対して、この一連の経験が深く影響を及ぼしているように思われることである。

河合氏は著書『大人になることのむずかしさ』の冒頭部分で次のように述べている。

「本書は親・教師、などの大人を対象としているものである。したがって、問題をかかえたり、つまずいたりしている青年に、大人がどのようにかかわってゆくか、ということが課題となっている。しかし、本書では、大人がどうすればよいか、という視点よりは、青年たちはいかに苦悩しているか、という視点にたって書きすすんでゆきたいと思っている。後者に対する深い理解がなくては、前者に対する答えが出て来ないからである。したがって、本書は大人が青年をどう「取り扱うか」について述べるハウ・ツールの書物ではない。現代のわが国の青年の直面している問題を、共に考えてゆこうとするものである。そのような姿勢をとるとき、われわれは自分が完成した「大人」として、未熟な青年をどう取り扱うかなどということではなく、「大人とは何か」「自分はいったい大人なのか」という問題が自分自身につきつけられていることを感じとるであろう。そのような問題意識をもって、「大人になること」について共に考えてゆこうというのが本書の狙いである。」¹²

青年期に焦点を当てて書かれているというこの著書の性質上、この文章には氏の青年たちへのかかわり方だけが述べられているように思われるかもしれない。しかし、この文章には青年期を含む、子どもという存在そのものに対する河合氏のかかわり方の根本的な姿勢が示されているように思われる。

家出、不登校、家庭内暴力などの、いわゆる「つまずき」を経験する子ども達に対して、大人は「どのようにかかわっていくか」という態度決定を迫られる。一見したところ、大人にとって子ども達の家出、不登校、家庭内暴力などの行動はまさに「つまずき」なのであって、子どもの健全な成長の歩みの過程

に生じた不健全な事柄であり、それらは起こらないに越したことはない「負の出来事」であると考えられよう。また、それらの「つまずき」に対して何らの対応処置も大人が取らない場合、子どもの成長にさらに大きな歪みや障がいが生じることが予想される場合もあるであろう。このように私たちが子どもたちの「つまずき」を何らかの危機的状況として受けとめ、「つまずき」の解決を求めて、その対応の仕方のみをたずねるとき、私たちは子どもや青年たちの取り扱い方、そのハウ・ツーを模索していると言ってよいかもしれない。しかし、このとき、私たちが「問題」として認識している事柄は、何らか子どもたちや青年たちの側にあるものとして捉えられていることに注意を払う必要はないだろうか。「問題」は子どもたちのうちにあるのであって、私たちのうちにはない。すなわち、あたかも私たち自身は完成された人間であるかのごとく、また、未熟さは子どもたちや青年たちにのみにあるかのごとく、私たちは私たち自身の生き方を不問にしている。

これに対して、河合氏は「つまずき」を、青年たちはいかに苦悩しているか、という視点から見ようとする。これは、氏がそもそも青年たちを苦悩する存在であると捉えていることを前提としており、そのうえで「つまずき」を青年たちの苦悩への理解を通じて何らか把握しようとする試みであると考えられる。

ところで、青年たちがいかに苦悩しているかを私たちが何がしか理解しようとするとき、私たちは、青年たちの苦悩がまさに彼らが青年たちであるがゆえに生じている側面があることに何ほどか気づかされるのではないだろうか。すなわち、青年たちが苦悩するのは青年たちが「大人になろう」とするからであると考えられる。子どもが「つまずく」のは、子どもが「大人」へと向かおうとする存在であるがゆえであるとも考えられる。しかし、このように考えるとき、私たちは「では一体、大人になるとはどのようなことなのか」「大人とは何か」という、より大きな問いが私たち自身に差し向けられているのを知るのである。

さて、「つまずき」を大人へ向かおうとする志向性を有するがゆえに苦悩する青年たちという視点からとらえ、かかわろうとする態度は、子どもたちや青年たちに対するいわゆる共感的な姿勢と呼ぶことができると思われるが、この姿勢は河合氏の子どもへのかかわり方の基調とも呼びうるものであるように思われる。しかし、このような共感的な姿勢こそは、先に見た河合氏自身の一連の経験と深く結びついているのではないだろうか。

すなわちまず、①河合氏自身が憧れの京都大学に入学することはできたが、数学科に所属しながら数学がわからず、強い劣等感を感じていたこと、②将来に向けて何をしたいかわからず、見通しがたたないため1年間休学したことを、先に私たちは見たが、そのことは、子どもたちが成長の過程で経験する様々な困難や挫折に対して氏が同情的な仕方にかかわる傾向性を生み出している一要因であるとも考えられよう。河合氏は大学休学をめぐる自らの体験を「いまからいうと無気力学生みたいなもの」と評しており、しかもこのような体験をしていることが「いまでも役に立っている」と思うと述べている。¹³しかし、「無気力学生」とは大人が子どもに見出すところの悪の一つに他ならないといえよう。この言葉を耳にした大人には往々にして、何に対しても積極的になれず、やる気なくダラダラと毎日をすごす若者の姿が浮かび上がるのではないだろうか。ここでの「無気力」とは、大人対子どもという構図をもとに、子どもたちの日々生きる姿が大人たちにとって活力の点で何か物足りなく、不活発に見えるときに、大人が貼るレッテルに他ならないからである。ところが、この一年の休学期間があってこそ、その後の河合氏の進路は開かれたとも言えるのかもしれないのである。そうであるならば、「無気力学生」と呼ばれている時期は、氏の人生において単に否定的評価を受けるだけに終わらない意味をもつ時期であったとも言いうるであろう。私たちはのちに、子どもと悪というテーマをめぐる河合氏の思索を検討するが、悪とよばれる経験が子どもにとって単に否定的なものにとどまらない意味を持ちうるというこの視点は河合氏の

すぐれた洞察の一つであると思われる。

しかしさらに重要と思われることとして、河合氏の家族が氏に対して示したかかわり方を指摘できるのではないだろうか。③「なんでもないので」大学を1年休学するのは難しい時代であったにもかかわらず、兄も母親も氏の考えに対して理解を示してくれたこと、④父親も子どもの話に耳を傾け、子ども自身を信じて、氏が休学することに対して許可を与えたことである。このように子どもがどうすることもできない切羽詰まった状況にいるときに、周囲の大人がいたずらに外部から状況の打開を図ろうとしないこと、別の言い方をすれば、子どもを信じて、混迷した状況のなかからやがて進むべき道が示されてくる時を待つことが大切な場合があることを河合氏はこのとき明確に体験したと言えるのではないだろうか。

また以上の点に付随して、⑤子どもが危機的状況を乗り越えていく際の、家族の存在の重みとその支えの重要性を河合氏が再認識したであろう点も大きな意味を持つものと考えられる。休学の話父親に切り出すにあたって、氏が困惑していたことを先に私たちはみた。すなわち、母と兄の助力を得ることによってはじめて、河合氏は「自分の本文を尽くしてがんばっている」父親に対して「学生は勉強するのが本文なのに」休学したい旨を打ち明けることができた。このことは氏にとって父親の存在が如何に重いものであるかを示していると考えられないであろうか。その重さは一家の中心としての父親という形式的な立場上のものだけではなく、河合氏自身の生き方と父親の生き方が何らかの仕方結びつきを有しているがゆえに、そしてそのような結びつき自体が氏に把握されているがゆえに生じる重さであると考えられる。家族は一人一人が自らの人生を生きているのではあるが、しかし、その各々の生き方そのもののうちに家族相互のかかわりが深く影響を与えていると思われるのである。父親は子どもの休学の申し出に対して単に許可を与えただけでなく、子どもの考えに耳を傾けたうえで、その考えに賛同して承認している。このことは、河合氏を大

いに勇気づけ、その後の歩みを支えたのではないかと私は考えている。このように、子どものつまずきに対する河合氏の同情的で共感的な心のあり方は、氏自身の体験、すなわちその青年時代の劣等感や挫折感、混迷の経験の上に培われたものであるように思われるのである。

3 『子どもと悪』

著書『子どもと悪』は、河合氏の長年にわたる臨床心理士としての豊かな経験と心理学および教育学にかんする広範で質の高い研究にもとづいた書であるという印象を受ける。親や教師という子どもとともに生きていく人たちにとって子どもと悪というテーマは避けて通ることのできない重要なテーマである。それは、単に子ども達はその成長の過程において実際に様々な悪い行いをしたり、つまずきを体験するからだけではない。そのような子どもの悪にいかにか大人がかかわっていくかが、子どもの人生の有り方を左右し、同時に大人自身の生き方を左右することがらだからである。本書の中では、盗み、暴力と攻撃性、うそ・秘密・性、いじめなど多くのことがらにかんして探求が行なわれ論じられているが、そのすべてを取り扱うことは本論文の射程をはるかに超えるため、いくつかのテーマに絞って河合氏の論考の意義について検討することにした。

「現代日本の親が子どもの教育に熱心なのはいいが、何とかして「よい子」をつくろうとし、そのためには「悪の排除」をすればよいと単純に考える誤りを犯して人が多すぎる。そのような子育ての犠牲者とでも呼びたい子どもたちに、われわれ臨床心理士はよく会っている。」¹⁴

「根本的なことはともかく、ここにあげた多くの例に触れて、読者の皆さんがもう少し根気よく子どもの悪とつき合って下さるようになれば、著者としてまことに幸いである。表面の理屈で言う限り「子どもが悪い」と言うのに抗弁できないが、「それでは子どもがあまりにかわいそう」と感じるが多すぎ

る。そんな子どもたちの気持ちを代弁する気持ちで、書いたようなところもある。自己実現のはじまりは、悪のかたちをとってあらわれることをよく知っていただきたい。」¹⁵

『子どもと悪』は前者の言葉で始まり、後者の「あとがき」をもって結びとされている。これらの言葉から、子どもたちが豊かな人生を生きるために大人はどのようなことに心を配るべきかという河合氏の配慮によって本書が書かれていることを私たちは読みとることができる。

ところで、先の言葉に含まれている内容を以下のように区分して理解することができるかもしれない。すなわち、①子どもを育てる立場にある親が、まさにその立場にあるが故に陥りやすい、悪にかんする誤った単純な思考があること、②そのような思考によって、子どもは「犠牲者とでも呼びたい」「あまりにかわいそう」な状況においやられること、③そのような思考を避けるためには、子どもの悪への根気強いつき合いが必要とされること、さらにそのようなつき合いを通じて、④悪が子どもの自己実現と何らかのかかわりと有していることが知られること、が主張されている。①から④のことがらが、『子どもと悪』のうちで河合氏によって具体的にどのように示されているのかを後に見ることになるが、その前にこれら4つのことがらが形式的にはどのような結びつきを有しているか、あらかじめ概観しておこう。

まず、本書において河合氏が読者に理解を求めていることがらの中心は④にあるといえよう。すなわち、子どもの成長に全く無関係に見えるばかりでなく、むしろ有害であると考えられる「悪」が子どもの自己実現と何らかにかかわっていることである。この点への気づきは、「子どもと悪」という事柄にかんして、より慎重で注意深く、かつ辛抱強くつき合うこと（＝③）へと私たちを導いていくであろう。また翻って、「子どもと悪」についての慎重で忍耐強いかかわり（＝③）は、④の認知を強めることになるだろう。このようにして③のかかわりと④の認知が相互に影響しながら私たちのなかで形成されることによっ

て、「悪の排除」をすることで「よい子」をつくろうとすることが短絡的な思考であること（＝①）が知られてくるのではないか。それはまた、大人のそのような短絡的な思考のもとで育てられた子どもたちが「犠牲者とでも呼びたい」「あまりにかわいそう」な状況に置かれていることへの認知（＝②）へと私たちを導くように思われる。

4 悪の両義性

「悪」というのが実に一筋縄では捉えられない難しいものであることがわかる。それは無い方がいいと簡単に言い切れないし、さりとて、あるほどよいなどとも言っておられない。それは思いの他に二面性や逆説性をもっている。』¹⁶

「悪がなくなるといえることは、人間の心に本来的に悪が存在しているからだとも言えるが、それが人間生活にある種の意義をもっているからだとはいえないだろうか。悪は不思議な両義性を持っている。』¹⁷

河合氏は悪の両義性・二面性・逆説性を強調する。確かに、悪が単に否定されるべき性格のみ持つのならば、それは私たちの生活から排除するべく努めればよいのであろう。しかし、悪はそれ自体として否定され排除されるべき性格を有しながらも、人間の生きることに何らか深いかわりを有し、子どもの場合はその自己実現との関連性を帯びていることに河合氏は注意を喚起する。では、悪は子どもの自己実現とどのように結びついているのか。これからいくつかのケースを見てみることにしよう。

4-1 創造性と悪

『子どもと悪』の第1章「悪と創造」は、氏が日ごろから一度ゆっくりとお会いしたいと思っている10名の方（日本の各方面で独創的な仕事をしていると氏が感じている人たち）にお願いして、その子ども時代の思い出を語ってもらった企画をもとにして書かれている。¹⁸ どの方も感動的な話をしてくださっ

たし、おそらく他では語られたことがないだろうと思われる「秘密」の話もたくさんあって、やはり子ども時代の体験というものは意味深いと氏は感銘を受けている。¹⁹しかし、ここに登場された十人の方々は、簡単に言い切るなら、子ども時代は今までいう「問題児」だったといえるのではないかと氏は語る。不登校、虚言、盗み、家出、自殺、反抗、孤独、数学の劣等生……なんでもとりそろえています、といたいくらいだと氏は指摘する。²⁰

すさまじい母子対決の中で、自殺をはかるまでに至った鶴見俊輔氏や、登校拒否から自殺を思い至るまでとなった日高敏隆氏などのケースを取り上げながら、氏はこのような創造的な仕事をしている方々の子ども時代の体験の意味について考察している。そしてまさにこれらの方の持つ創造性から、河合氏は彼らが子ども時代に行った「悪」についてその意味を問うのである。

まず、鶴見氏の自殺未遂や日高氏の登校拒否が、それぞれ母親への反抗、学校に対する反抗として行われていることに氏は着眼する。²¹一見したところでは、このような反抗は確かに子どもが自分に気に入らないものに対して行う拒否反応の一つと見なされうるが、しかしその拒否反応は子どもが自立へと向かう存在であるがゆえに生じるものとして理解されている。すなわち、それは子どもたちが自らの足で立ち自らの力で生きていこうとして、「自分を取り巻き、取り込もうとするものに対して」向けられた反抗なのである。²²ところで、子どもはすべて、大人や学校など彼らを取り巻く何らかのものの保護のもとで成長し、自立に向かうのであるから、自立に至るステップとしてそれらに向けられた反抗が生まれてくると氏は理解するのである。²³

氏は創造性の高い人は自立的であり、自分の考え、自分の判断などを踏まえて、しっかりと立つ力があることを指摘する。²⁴もしそうであるならば、創造性の高い人ほど、子ども時代における自立へ向けての欲求は強く激しい姿をとる場合があると考えられるのではないか。したがって、子どもの自立が何らか「反抗」というステップとしてまず生じてくるのであれば、創造性の高い人の

場合、「反抗の程度が他と異なって」強く悪のすがたをとって現われである場合があることについての氏の指摘も納得されよう。²⁵ 以上の探求においては、創造性と自立、自立と反抗、反抗と悪が何らかに関連付けられて理解されうることが示されている。

子どもの悪が、鶴見氏や日高氏の場合と同様に創造性との関連を有しながらも、しかし反抗とは別のかたちをとっていると考えられるケースを氏は指摘している。それは、子どもが自分の好きなことに集中することによって、その子どもの個性が表われる場合である。作家の大庭みな子氏は読書好きで、子どもの頃から熱中していた。それも大人の本を読むのが好きで、小学校5、6年生の時から大人が読む『世界文学全集』を読んでいたりしたという。²⁶ 他方、友だち関係では大庭氏が「とても孤独でした」と答えていることに対して、河合氏は「それは当然と言えば当然である」と見做している。読書に明け暮れる生活は子どものうちに内省的な時間を大切にする傾向性を生み出し、そのことが友人関係の希薄さを生み出していると河合氏は解しているように思われる。さらに、河合氏は大庭氏にとって孤独であることは両義的な意味を持っていることを指摘している。

「こんな人が子どもの頃から孤独を体験しなくてはならなかったのも当然であろう。孤独はそれに耐えられない人には、強い破壊力を発揮するし、それに耐え得る人にとっては、自分を鍛えてくれるものとして意味を持ってくる。このようにして、大庭さんは「個」ということの表と裏、光と影を十分に体験し、それによって成長してきた人と言える。」²⁷

すなわち、大庭氏にとって孤独であることは、一方ではそれに耐えなければならない境地として経験されながらも、自分を鍛え、その創造性を高めるものでもあったと言えよう。このようなとき、教育熱心な先生であれば「読書もいいが、友人関係はもっと大切だ」とか「孤独はいけない」とかいうのではなかろうか、と河合氏は言う。²⁸ 子どもにとってはその子の個性であり、また創造

性の源であるものが、大人にとっては悪のかたちをとって顕現する場合があるのであり、その点への配慮を欠いていると大人は子どもの個性を歪め、創造性を枯渇させる結果を招いてしまうおそれがあることが示されていると言えよう。このケースでは、創造性と個性、個性と悪が何らかかかわりがあることが示されている。

さて、鶴見氏、日高氏、大庭氏の子ども時代の悪の体験について河合氏の解釈をこれまで見てきたが、それは子どもと悪について私たちに或る事柄を示してくれているように思われる。三人のケースについて振り返ると、悪のかたちについてみれば、前の二人は反抗であり、後者は孤独であって異なりがみられる。しかしながら、そのような状況の根本には共通性があると考えられないだろうか。前の二人の反抗は自立へのステップであった。しかし、そもそも子どもにとっての自立とは、その子がそれになるべきものとしての自己の実現であるとも解しうるものであり、その限りにおいて、自立は個性の実現の意味を担っているといえるであろう。また、大庭氏の場合にもその個性の顕現は、そのような仕方における自己の実現の意味を担っていたのではないだろうか。そうであるならば、三者の子ども時代の悪は、いずれも各々の人にとっての危機的な状況を孕みながらも、他面において個性の現出としての自己実現の意味を何らか担っていたと考えられるのである。河合氏は印象深く次のように述べている。

「大人になって自分の子ども時代を振り返ってみると、自立の契機として何らかの意味での悪が関連していたことに気づく人は多いのではなかろうか。これはもちろん危険なことである。下手をすると、まったくの悪の道への転落につながるだろう。しかし、危険のない意味あることなど、めったにないと言わなければならない。」²⁹

4-2 盗み

河合氏は盗みもまた自立と結びつく側面を有していることを指摘し、プロメテウス神話の意味について考察している。³⁰ この神話には子どもではなく、人

間の自立がテーマとして関わっていることが読み解かれており、極めて興味深い分析がなされているが、ここではこの点には深入りせずに、子どもと盗みについての氏の探求を追跡しよう。

氏は盗みという人間の行いについて、その意味を人間が生きることとのかかわりの点から考えるために、「とる」いう言葉に着目する。人間が生きていくためには食物を摂取しなくてはならない。しかし、摂取するという意味での「とる」は、盗むという意味でも用いられる。子どもの場合は成長するために、必要なものを「とる」必要がある。そのように考えると、子どもが盗むのは、その子どもの成長にとって、何か「必要不可欠」のものを得ようとしている、と考えられることを氏は指摘する。³¹

子どもへのしつけは必要であって、大人は盗みが絶対にいけないことであると子どもに教えていくことが大切であるが、それと同時に、その子の成長にとって必要なものを、大人がよく考えなければならぬと氏は注意を喚起している。³² 親がなすべきしつけを行っていない家庭において、子どもがみすみすすぐ見つかるような盗みをするがあると氏は報告している。そして、このような場合、子どもは無意識にしつけの必要を感じて、親からそれを引きだそうとしていると氏は指摘する。³³ このケースを見ると、盗みがメッセージ性を帯びていることに私たちは気づく。子どもは何かある事物 (A) を「盗む＝とる」というその行為において、別の何か (B) を「とる」ことを欲しているのである。その子どもが本当の意味で欲しているのは、BであってAではない。しかも、子どもは自分ではBを手に入れることはできず、それを与えることができるのは親だけであるため、Aを「とる」という振る舞いによって親にメッセージを送っていると考えられるのである。

さてでは、厳しいしつけをしたにもかかわらず、子どもが盗みをした場合はどう考えるべきなのか。氏はつぎのようなケースを報告している。少し長い引用になるが、後の考察のために必要であり、また氏の文筆も冴えわたっている

ため、省略せずに全文を記すことにする。

「厳しいしつけをしていたにもかかわらず、小学2年生の女の子が盗みをした。買い与えたはずのない文房具を持っているので、問いただしたら、子どもが文房具屋からちょいちょい窃盗していたことがわかった。母親は怒りでわめきたて、あれほど人のものを盗ってはならないと教えてきたのに、というので、「自分のことは自分で始末をつけなさい」と、盗品を持って文房具屋にあやまりに行かせようとした。「お母さんは知りませんから」と言い、茫然として立っているわが子を見ているうちに、はっと気持ちが変わった。

子どもの姿があまりにもかわいそうに見えると共に、自分が子どもだった頃のことをふと思い出した。「お姉さんだから、しっかりしなさい」と言われ、何となく母親にまわりつきたいと思っているときに、手を払われたりして、ずいぶん悲しい思いをしたことが思い出された。「お母さんは冷たい」と思ったものだが、自分はそれと同じようなことをしているのではないか。そう思っているうちに、思わず子どもの手を取って、二人で泣いてしまった。

ところが、母親としては次にどうすればいいのかわからなくなった。ここである程度やさしくしたのはいいとして、自分が子どもの代わりに文房具屋に謝りに行ったのでは、子どものしつけ上、甘すぎるのではなからうか。と言って、一人で行かせるのは小学2年生にはきつすぎる。それにしても、自分のせっかくしてきた厳しいしつけは何だったのか。というわけで、いったいこのようなときにどうすべきかと相談に来られた。』³⁴

厳しいしつけをしてきたこの母親は、子どもの将来のことをよく考えて子どもに接してきた親であろう。「盗品を持って文房具屋にあやまりに行かせようとした」ことから考えてみても、責任感のある自立できる子どもに育てなければという思いをつねづねから強く持っていたのではと感じさせられる。おそらく子どものしつけの仕方について、恐らくこの母親はこれまで、自らに欠けたところのあるかどうかを疑問視することはなかったのではないだろうか。しか

し、このとき不思議に或る過去の記憶がよみがえり、母親はどうしていいかわからなくなったのだと考えられる。

このようなとき、氏はすぐに結論を出すことはしないという。これをどう「解決」するかなどということより、このことによって来談された人が何を発見し、何を自分のものとしていくかの方が大切だと河合氏は考えるのである³⁵。このような考え方に子どもの悪についての河合氏のかかわり方の特質が極めて明瞭に現れ出ているのではないか。私たちは先に、子どもと悪というテーマへのかかわり方が、子どもの経験する個々の「つまずき」や「悪」に対して大人がどう対処するかではなく、「一体、大人になるとはどのようなことなのか」「大人とは何か」という、より大きな問いが大人に差し向けられていることを理解しようとするものであることに触れたが、今のケースにおいて氏のそのような姿勢がはっきりと示されているように考えられるのである。

このようなケースの「解決策」のみを提示することは、氏にとって決して難しいことではないであろう。このときは、母親は河合氏と対話する中で、子どもと一緒に文房具屋にあやまりに行くという結論に達している。たしかに、母親が子どもと一緒に文房具屋にあやまりに行くことは、厳しすぎず甘すぎずの両極端を避けた中庸の道であり、この選択肢によって今回の盗みは一件落着するかもしれない。しかし、子どもの悪はそのようなハウ・ツウ的な対処をしてしまうのでは、ことがらを全く台無しにしてしまうような重要性を含みもっているとは氏は考えているのである。氏は母親から経過を聞いたりしながら、その間に、子どもは盗みまでして「ほんとうは、何が欲しかったのでしょうかね」などと問いかけてみたりするという。³⁶ すなわち、氏は母親にこの子どもの盗みには母親に対する何らのメッセージが込められているのではないか、もしそうならそのメッセージとは何かと問いかけているのである。

子どもの欲しかったのは、母親のやさしさである、と氏は言う。³⁷ すなわち、文房具 (A) を「盗む=とる」というその行為において、その子が「とる」こ

とを欲していたものは、母親のやさしさ（B）だったのであり、またそのこと自体に母親自身が気づくことが欲せられていたと言えよう。その「やさしさ」はその子の成長にとってなくてはならないものであり、それは母親しかあたえることができなかつたものであったことになる。こうして、この小学校2年生の女の子の盗みは、この子どもの側からみて両義性を持っていることが分かる。

では、母親にとってはどのような意味を持つのか。母親はこの盗みが子どもからのメッセージを帯びていたことを自ら発見した。氏は次のように言う、

「子どもは有り難いものだ。自分にとって（つまり母親にとって）必要なものを、盗んででも得ようとする」³⁸

子どもが求めていた母親のやさしさは、実は母親自身にとって必要であったものだったと氏は解しているのである。それはどのような意味においてであると考えられるだろうか。それは、「子どもの姿があまりにもかわいそうに見えたときに、何らかに成就したことがらに含まれている。自らに求められているもの、それは呆然としているわが子をかわいそうに思う心であり、子をあわれむ心であり、母たるものの持つべきやさしさであったことに気づくことができたという意味においてである。また、これこそがこの母親自身が自らの母に求めていたやさしさでもあったと気づくことができたという意味においてである。この母親は厳しいしつけをしてきたが、いま子どもからやさしさを求められていることを知ったのであった。しかしでは、しつけは廃棄されるべきなのか。

「子どもに対するしつけは大切である。これは間違いない。しかし、どのような正しいことでもスローガンになると硬直する。硬直した思考は単純に二者択一的になる。厳しくするか、やさしくするか。前者をとることは後者を否定することだと考える。これは機械のすることで人間のすることではない。

人間が機械ではなく、生きているというのは、対立するかのように見える厳しさとやさしさを、いかにして自分という存在のなかで両立させていくかという努力を続けることである。そして、その両立の仕方のなかにその人の個性が

頭われてくる。」³⁹

対立するかのように見える厳しさとやさしさを自分のうちに両立させる努力が人間には必要とされていること、これこそ、子どもの悪が大人に発しているメッセージであろう。そして、その努力は決して徒労に終わるものではなく、そのような努力のうちにこそ、その人が本来それになるべきもの、すなわちその人らしさが実現されていくのであり、またそうであることを知っている者、それが大人ではないだろうか。そして、そのような重要なメッセージが子どもの悪には秘められているかもしれないことに気づいている者、これが子どもとともに生きる者としての大人であると考えられないだろうか。このように、子どもの悪は子どもの成長にとってなくてはならないものを何らかし獲得しようとする意味を持つと同時に、私たちにその悪の意味するところを考えさせることによって自らを反省する機会となり、まさにそのことによって私たちを大人へ変えていく契機となりうることを示されているのである。

5 「子どもの宇宙」という思想

これまで、子どもと悪についての河合氏の思索の意味について若干の考察を行ってきた。そこで、明らかになったことは子どもにとって悪はたしかに恐ろしい破壊性を持つものでありながら、しかし子どもの成長にとって、また場合によっては子どもとかかわる大人にとっても、或る種の意義を有しているのではないかということであった。大人から「悪」のレッテルを貼られる子どもの行動を、その子どもの自立や個性の発現という観点からみると、それは排除すればよいと簡単に言い切れない側面を有することが示されているのである。そして、子どもの悪を単に否定的なことで終わらせないためには、子どもとともに生きるおとなのかかわり方が重要な意味を持つのではないかと考えられるのである。

しかしでは、子どもと悪というテーマにかんして、河合氏がこのようなアブ

ローチをする背景には氏のどのような考え方が働いているのであろうか。子どもに対するどのような見方が氏をこのような思考へと導いたのだろうか。それは、一人一人の子どもがそれになるべき存在としての個性を有していること、そしてその個性は尊重されねばならないという氏の考え方であるように思われる。しかしでは、河合氏が子どものうちの発現しようとしている個性を尊重するのはどのような考え方にもとづいてのことなのであろうか。それは、発現されるべきものとしての子どもの個性の一つ一つが宇宙であることの発見にもとづいていると思われる。氏は印象深く次のように語っている。

「この宇宙のなかに子どもたちがいる。これは誰でも知っている。しかし、ひとりひとりの子どものなかに宇宙があることを、誰もが知っているだろうか。それは無限の広がりと深さをもって存在している。」⁴⁰

子どもにかんする河合氏の思索の根底に流れているもの、その一つは「子どもの宇宙」という思想ではないかと感じられるのである。そして大人が「子どもの宇宙」の存在を忘却するとき、「子どもたちのなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、回復困難なほどに破壊したりする」と氏は警告を発するのである。⁴¹

かみさま

やましたみちこ

かみさまはうれしいことも

かなしいこともみなみえています

このよのなか

いいひとばかりやったら

かみさまもあきてくるんとちがうかな

かみさまが

かしこいひともあほなひともつくるのは

たいくつするからです⁴²

河合氏はやましたみちこさんの宇宙のすばらしさに感嘆し讃えている。やましたさんの宇宙の素晴らしさ、それはやましたさんの宇宙をつくり、その宇宙を統べている神様のすばらしさであろう。氏は次のように言う。

「私はこの詩を、現代の世界で、正義のためには戦争も止むなしといきまいている多くのファンダメンタリストたちに見せてやりたい。彼らの神が肩をいからせ、まなじりを決して、正義のための大量殺人をも辞せずと言っているとき、やましたさんの宇宙の神様は、見事な自然体で、世の中いろいろあっていいのじゃないの、とゆったり構えているのである。」⁴³

やましたさんの宇宙は、嬉しいことも悲しいこともみんな見ている神様が治められる宇宙である。私たちの生きている世界は、やましたさんの宇宙のなかで生かされており、その宇宙をやましたさんは生きている。私たちはこのような詩にふれるとき、子どものうちに宇宙があることに驚き、その宇宙の広大さと豊かさに驚くのである。

ほし

原 ひろし

おほしさんが
一つでた
とうちゃんが
かえってくるで⁴⁴

この詩の作者の原ひろし君は2歳であるという。短い詩のうちにひろし君の宇宙の広がり示されている。ひろし君の宇宙は天に星を戴いて広がっており、その星の輝きに照らされて、ひろし君はとうちゃんの帰りが近いのを心待

ちにしている。「ひろし君にとって、とうちゃんは空に輝き出てくる星であり、そして、おそらく、この父親にとってひろし君は希望の星なのであろう。二つの星は宇宙のなかで輝きあい、交信しあっている」と氏は美しく評している。⁴⁵ひろし君はとうちゃんが星として輝く宇宙を生きている。小さな子どものなかの宇宙的な広がりの中に私たちは招き入れられるとき、子どもにとって父親がどれほど大切な存在であるかが私たちに何ほどこ伝わってくる。

私たちは先に、子どもと悪というテーマにかんする河合氏の独自のアプローチの背景には、発現されるべきものとしての子どもの個性の一つ一つが実は宇宙であることの発見があるのではないかと考えたが、このように子どもの宇宙を私たちがおとづれるとき、その子どもにとっての父母の存在の大きさが何らか感じとれるのではないだろうか。大人が「子どもの宇宙」の存在を忘却するとき、大人は「子どもの宇宙」を破壊することになると氏は警告するのであった。そうであれば、父母が自らの子どもの宇宙の存在を忘却するとき、父母は子どもの宇宙の中で自らがどれほど大切な存在であるかを忘却することになるといえないだろうか。

私たちは先に、盗みをした小学2年生の女の子のケースについて若干の検討をおこなったが、この女の子は自分が盗みをすれば、母親をどれほど嘆き悲しませるかは十分に分かっていたことであろう。それでもなお、この子が盗みをしたことは、この子にとってどれほどやさしいお母さんが欲しかったのかを示しているとは考えられないであろうか。この子が盗みをしてまでやさしさを手に入れようとしたのは、それほどこの子にとって母親が大切であったからであると考えられる。「子どもの宇宙」を尊重する河合氏は、同時にその宇宙の中で大人や親がどれほど重要な位置をしめているかについての洞察があったのではないだろうか。その洞察は子どもと悪への氏のアプローチを支えているものの一つであったように思われるのである。

- ¹ 河合隼雄『河合隼雄自伝—未来への記憶—』新潮社、2015、p92。
- ² 河合、前掲書、p105。
- ³ 河合、前掲書、p96。
- ⁴ 河合、前掲書、p99。
- ⁵ 河合、前掲書、p106。
- ⁶ 河合、前掲書、p107。
- ⁷ 河合、前掲書、p108。
- ⁸ 河合、前掲書、同箇所。
- ⁹ 河合、前掲書、同箇所。
- ¹⁰ 河合、前掲書、p109。
- ¹¹ 河合、前掲書、p110。
- ¹² 河合隼雄『子どもと教育 大人になることのむずかしさ 青年期の問題[新装版]』岩波書店、1996、p3-4。
- ¹³ 河合、前掲『河合隼雄自伝—未来への記憶—』p109。
- ¹⁴ 河合隼雄『子どもと悪』岩波書店、1997、p3。
- ¹⁵ 河合、前掲書、p226～7。
- ¹⁶ 河合、前掲書、p32。
- ¹⁷ 河合、前掲書、p47。
- ¹⁸ この企画は後に、河合隼雄『あなたが子どもだったころ—こころの原風景』、講談社 + a 文庫、講談社、1995、として出版される。
- ¹⁹ 河合、前掲『あなたが子どもだったころ—こころの原風景』文庫版まえがき、p4。
- ²⁰ 河合、前掲書、p4-5。
- ²¹ 河合、前掲『子どもと悪』、p 19、24。
- ²² 河合、前掲書、p24。
- ²³ 河合、前掲書、p18。

- ²⁴ 河合、前掲書、同箇所。
- ²⁵ 河合、前掲書、同箇所。
- ²⁶ 河合、前掲書、p12。
- ²⁷ 河合、前掲『あなたが子どもだったころ—こころの原風景』 p316-7。
- ²⁸ 河合、前掲『子どもと悪』、p13。
- ²⁹ 河合、前掲書、p25。
- ³⁰ 河合、前掲書、p73-8。
- ³¹ 河合、前掲書、p79。
- ³² 河合、前掲書、p80。
- ³³ 河合、前掲書、p81。
- ³⁴ 河合、前掲書、p81-2。
- ³⁵ 河合、前掲書、p83。
- ³⁶ 河合、前掲書、同箇所。
- ³⁷ 河合、前掲書、同箇所。
- ³⁸ 河合、前掲書、p84。
- ³⁹ 河合、前掲書、p84-5。
- ⁴⁰ 河合隼雄『子どもの宇宙』岩波新書、岩波書店、1987、p1。
- ⁴¹ 河合、前掲書、同箇所。
- ⁴² 鹿島和夫・灰谷健次郎『一年一組せんせいあのね』理論社、1986年。
- ⁴³ 河合、前掲書、p2。
- ⁴⁴ 灰谷健次郎=編、宮崎学=写真、『お星さんが一つでた　とうちゃんがかえってくる
で』理論社、1984年。
- ⁴⁵ 河合、前掲『子どもの宇宙』 p11。